モノグラフ

アジアの人びとが見たヨーロッパ
―特別展「アジアとヨーロッパの肖像」から

吉田 憲司（よしだ けんじ）
本館文化資源研究センター

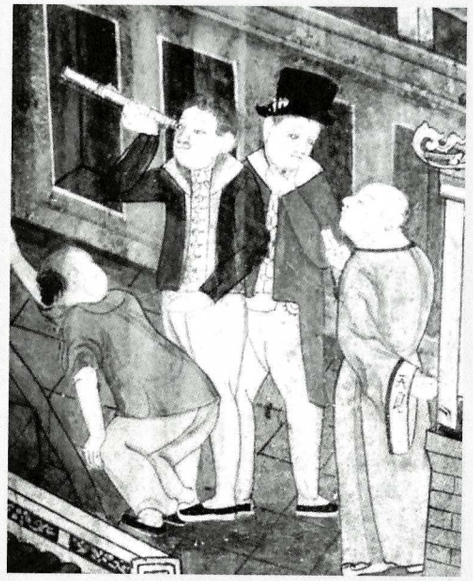
アジアとヨーロッパの人びとが、自らを、そして互いをどのように見つめてきたのか。そのまなざしのやり取りの軌跡を、広義の「肖像」、つまり人体表現を伴う造形のなかにたどろうというのが、今回の特別展「アジアとヨーロッパの肖像」のねらいである。この展示は、今後アジアとヨーロッパの計五ヵ国を巡回する予定であるが、日本での展示では、やはり日本のわたしたちがヨーロッパをどのように見てきたのかを示す作品が多くを占めている。しかし当然のことながら、ヨーロッパの人びとを描きとめてきたのは、日本の絵師だけに限らない。アジア各地で、ヨーロッパの人びととの出会いがあり、その有様がさまざまな造形のなかに刻み込まれていった。

日本の観客＝読者にとっては、南蛮屏風や長崎版画、横浜浮世絵などに描きとめられたポルトガル人やオランダ人などの「異国人」の姿は、すでになじみ深いものになっていよう。一方で、アジアの各地で生み出された、それぞれの土地での「異国人」図に接する機会は、これまでほとんどなかったように思われる。今回の特別展は、そうしたアジアのなかでのヨーロッパ像の異同を目の当たりにする貴重な機会となったはずである。

タイの各地の寺院の壁画に、中国人の姿に交じって、ヨーロッパ人の姿が描きとめられている（図1）。二〇世紀初頭のベトナムの民衆版画においては、フランスの植民地統治下にあって、フランス人の生活の様子を描いたものが多数生み出された。今回の展示では、当時の版木を用いて近年復刻された版画が、ベトナム民族学博物館から出品されている（図2）。ヒンドゥーの神々の姿を描き出す、バングラデシュの刺繍布「カンタ」には、神々を取り囲むように、ヨーロッパ人の姿が配されている（図3）。ともに、自分たちの世界とは異なる世界の存在として、両者は重ね合わされてイメージされたのだろうか。

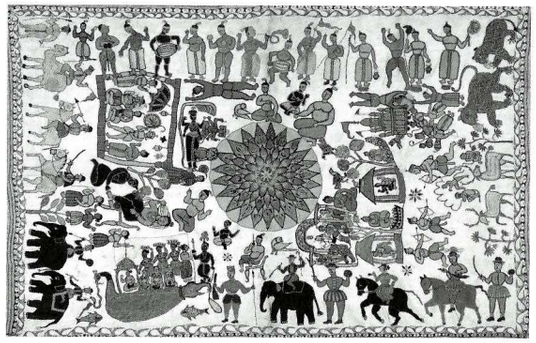
オランダ・アムステルダムのトロッペン博物館からは、旧オランダ領東インド、現在のインドネシアで生み出された多様な造形の数々が出品されている。ジャワのバティック（ろうけつ染め）の布には、ジャワにおけるオランダ軍の様子を染めあげたものが見られる（図4）。また、「白雪姫」や「赤頭巾」など、ヨーロッパのおとぎ話を題材としたバティックも制作されている。ジャワの工房が、ヨーロッパの童話を収めた絵本を入手し、その挿絵をもとに図柄を考案したものである（図5）。

影絵人形劇ワヤン・クリットのなかにも、ヨーロッパ人を表現した人形が見られる。ワヤン・クリットは、ラーマーヤナやマハーバーラタなどの物語をおもな題材としているが、ジャワ戦争を題材としたワヤン・プルジュアンガンには、ジャワのマタラム王国の王族や戦士たちと、その抵抗を制圧しようとしたオランダ領東インド総督マーカス・デ・コックとその兵の人形が登場する。デ・コック総督をあらわす人形には、ラーマーヤナの魔王ラーヴァナの人形に通じる特徴がうかがえる（図6）。その人形を、同じデ・コック総督を描いたコーネリス・クルースマン（オランダ）の手になる肖像画と比べれば、それぞれの表現に込められた人びとの思いの違いがうかがえよう（図7）。人（ひと）を描くことは、じつは、自分自身を描くことであったようだ。

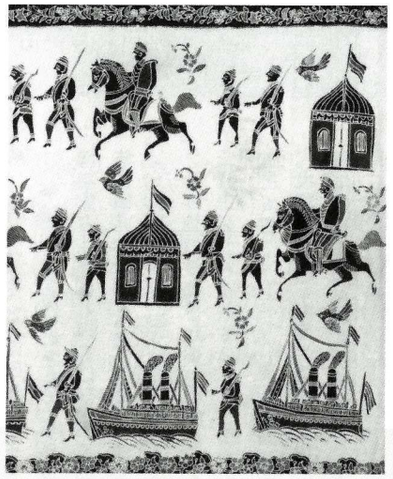


（図1）ヨーロッパ人と中国人を描いた壁画
作者不詳　（タイ）　19世紀　タイ国立美術館所蔵

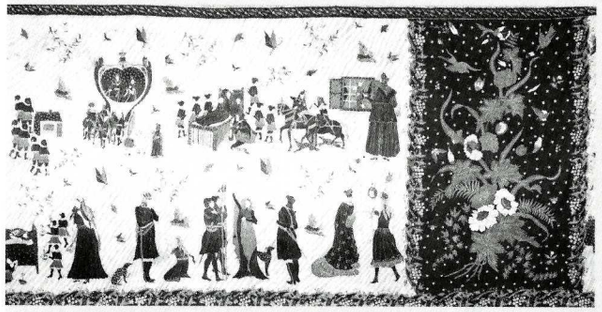
（図2）フランス建国記念日　ル・ディン・ンギェン
ハントロン派　（ベトナム）
原作20世紀初頭　2005年復刻　ベトナム民族学博物館所蔵



（図3）千華弁の蓮とヒンドゥーの神々（カンタ）　作者不詳
（バングラデシュ）　19世紀中ごろ　福岡アジア美術館所蔵

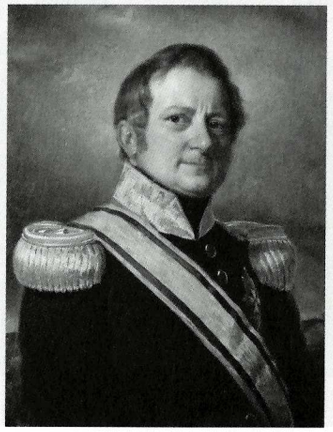


（図4）1894年のオランダ人による
ロンボク島征服を描いたバティック
作者不詳　（インドネシア）　1985年ごろ
トロッペン博物館所蔵



（図5）
おとぎ話「白雪姫」の図柄の
バティック
作者不詳　（インドネシア）
1875－1900年
トロッペン博物館所蔵

（図6）
ヘンドリック・マーカス・デ・コック総督を
かたどった影絵人形
作者不詳　（インドネシア）
1979年以前　トロッペン博物館所蔵



（図7）
総督ヘンドリック・マーカス・デ・コック男爵の肖像
コーネリス・クルースマン　（オランダ）
1826－1830年　トロッペン博物館所蔵